治・大正・昭和の女流文学

板垣直子著

著者略歴

明治29年11月13日青森県に生まる。大正3年4月青森県立弘前高女卒業，大正7年日本女子大学英文科卒業(引き続き研究科在籍)。大正10年東京帝国大学文学部第1回女子聴講生として入学。

現在国士館大学文学部教授。千葉大学文学部講師。日本女子大学文学部講師。文芸評論家。

主著

「現代小説論」「現代日本の戦争文学」「樋口一葉」「漱石・鷗外・藤村」「欧州文芸思潮史」「林芙美子」「林芙美子の生涯」「漱石文学の背景」「文学概論」他。

現住所 東京都渋谷区代々木5丁目51番地

明治・大正・昭和の女流文学

昭和四十二年六月五日 初版発行
昭和四十六年九月五日 三版発行

定価 一八〇〇円

著者 板垣直子
発行者 及川篤二
印刷所 共信社印刷所

東京都千代田区猿楽町二の二の六
株式会社 桜楓社
電話(二九一)五六六〇～二

序

本書をかくことは、ながいこと私の願いだった。日本の女流文学でも、本書をよめばわかるとおり、個々の女流作家を、男流と比べると、女流作家の作品が、はるかに個性的ですぐれてることがある。だから、才能があり、個性のつよい女流作家がいるとしたら、どんなにかえらい作品が、女流のなかに生まれるだろう。そこに、女流文学の未来があり、無限の可能性も約束されてるわけだ。

現在は日本にたくさんの女流作家がいる。前代の明治、大正と比べものにならない数である。それも明治・大正期は、生活環境が女性にとり、もっとはるかにわるかった。だから、ものをかく女流たちの苦労は大変だった。本書にのべた各女流作家らの生涯をみると、その間の事情がよく知られる。これから文学で出発しようとする人々、また、すでにかきだしてる人々も、本書に語られてる各女流たちが、いかに苦しみ、いかに生き、いかに目的を達したかの姿に、感慨のふかいものがあろうとおもう。

女流作家のなかにも、明治末から活動し、現在の昭和四十年代にも、ものをかいてる野上弥生子氏のような人もいる。私は野上氏を大正時代にふくめた。野上氏のすぐれた代表作類は、大正時代に発表されてるからだ。また、明治と大正期には、日本の女流文学が発生し、形成されていった過程をも示すという意味で、小説以外の女流の飜訳や短歌方面などもいれた。これについても、断わっておきたい。

この冬はとりわけ寒かった。各大学に講義にゆく傍ら、私は午前、午後、夜分にかけて、締切りに迫られた本書を、

営々とかきつづけた。私は女性であるから、このような明治百年の女流文学も跡づけた。私がかつて生きて、一般文学を学び、研究した結果、このような本も生まれた。私の文学観は先進国の文学から養成されてるが、日本の女流文学をも愛するから、このような記念をのこすのである。

昭和四十二年六月　　代々木にて　　直子しるす

重版に際して

明治以後一世紀間にわたる日本の女流文学史でもある本書の重版にさいし、私の喜びは大きい。この機会に、誤植その他、多少の訂正を試みた。

昭和四十四年二月　　代々木にて　　板垣直子しるす

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

明治・大正・昭和の女流文学

目次

序

明治時代

樋口一葉……七
与謝野晶子……二三
明治時代の女流文学の流れ……四八
「青鞜」派の文学運動と婦人運動……六一

大正時代

田村俊子……七一
野上弥生子……八七
大正時代の女流文学の流れ……一〇五

昭和時代

吉屋信子……一一九

宮本百合子……一四〇
宇野千代……一七七
網野菊……一九五
林芙美子……二一四
平林たい子……二三四
佐多稲子……二五一
岡本かの子……二六八
幸田文……二八四
壺井栄……三〇一
円地文子……三一一
昭和時代の女流文学の流れ……三二九
「火の鳥」……三五〇
「女人芸術」……三五五
日本女流文学者会……三六〇

明治・大正・昭和の女流文学

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

樋口一葉

生涯

樋口一葉の本名は奈津子である。明治五年（一八七二）の旧暦（当時は旧暦）で、三月二十五日に生まれた。奈津子は一葉、落葉、夏子の三つの名前をつかった。むろん一葉を一番多くつかった。この号の由来は支那であり、第二番目の作品の「闇桜」（明治二十五）から用いた。父親の樋口則義は、山梨県東山梨郡大藤村中萩原の農家の出である。家には文蔵などがあって、和漢洋の素養をもっていたので、百姓で終るのを好まず、家督を弟にゆずって、江戸にでた。妻の滝子は同村の庄屋の娘であったが、二人は恋仲として結ばれた。則義が安政年代に、二度目に江戸にきたとき、彼は旗本の菊池家に働き、長女の藤子をうんだばかりの妻は、旗本の稲葉家に通勤の乳母となって、生計の道をたてた。則義が士族に変ったのは八丁堀で与力の株をかったからだった。明治になってから、則義は東京府庁に写字係として雇われ、次女の奈津子は、麹町区内幸町にあった府庁の官舎（長屋造りの）に、生まれたわけだった。

一葉の十歳（明治十四）のとき、則義は警視庁の警視属となり、あとしばらく生活が安定して、長男を法律学校に入れた。しかし、則義は下級官吏で終る意志がなく、友人等と組んで、馬車運送会社というのをおこした。一時は多少の小金ができ、自宅の他に貸家ももったが、結局その仕事もうまくゆかず、しかも二十二年に、脳溢血で死んだ（六

十歳)。

そのあと、遺族としては、母と一葉と三女邦子の三人がのこった。長女はもう嫁し、長男の泉太郎は肺患のため、父より四年前に死亡、次男の虎之助は、十六歳で、京都に陶工修業に出、早くから分家した。三女の邦子は娘時代蟬表の内職をした。彼女は一葉が明治二十九年に亡くなったあと、一時姉の弟子で親友だった大橋音羽夫人のとき子の邸に引き取られたこともあった。二十五歳で養子を迎え、小石川の伝通院の筋向いに、文房具店を開いた。今の大曲りから安藤坂をへて本郷にでる道の右側にあたる。私は戦前に単行本の「樋口一葉」をかいたとき、ここを訪ねたことがある。立派に繁昌した礫川堂であった。むろん邦子夫婦はもうなくなり、長男の悦は安田銀行員となって他にすみ、店は次男がやっていた。邦子夫婦が店をだしたとき、姉一葉の関係から、博文館や金港堂が、書籍をまわしてくれた。書籍部を設けたことが、繁栄の鍵となった。

一葉が丹念につけた名文、名筆の日記は、今では日記文学の至宝の一つといわれている。しかし、一葉は死ぬ前に、日記をすべて焼きすてるよう妹に命じた。が、邦子はいつも涙なしに思い出せなかった不幸な姉の片身のすべてを、すてさるにしのびなかった。日記だけでなく姉の遺品をすべて保存した功労者である。則義は奈津子に望みをかけて、幼少から学校に通わせ、傍ら、塾にやって漢文の手ほどきもうけさせた。一葉の文章上の発展について、漢文を学んだことは非常なとくであった。一葉は、七歳から草雙紙をよんで、物語をたのしんだ。父親は娘に本も買って与えた。学校と縁をきったのは十二歳のときだったが、父は十三歳の一葉を、和田重雄という歌人に入門させた。ここでは半年間の通信教育によって、作歌法を学んだ。十三歳の一葉は、頭痛を訴えた。当時呼吸器病の名医だった佐々木東洋の診察をうけたところ、「肩のこり」が下におりると、大変なことになるから気をつけよといわれた。

一葉は父の方針から十五歳のとき、中島歌子の「萩の舎」塾に入門することができた。父の友人の脚気の医者の遠

田澄庵の娘も、中島塾に通っていたので、澄庵のすすめと紹介によったのである。樋口家ではじめ澄庵のすいせんした「女流の学者」とは、当時学問と和歌の両方で有名だった下田歌子に違いないと噂しあった。そこでわれわれが思うのに、もし一葉が下田歌子の方に紹介されていたとしたら、一葉の生涯にもっと別な、変った転進がおこっていたろう。

中島歌子は水戸藩の天狗堂の林忠左衛門の未亡人であった。彼女の和歌の師が加藤千浪。同門の歌人の手づるで上流社会との連絡をもった。彼女には「萩のしづく」という歌集がのこっている。歌人として大したことはなかったが、加藤門下の御歌所出仕の伊藤祐命の手づるから、歌子は御歌所の寄人にも推薦されたことがある。しかし、これは健康がすぐれないという理由で辞退した。小石川の安藤坂に三十年間塾をもち、三千人に及んだという大勢の弟子をとり、明治三十六年に死んだ。一葉はここに、はじめは弟子として入り、和歌、書道、古典を学んだが、父の死後生活が苦しくなったので、歌子に話して、塾に寄宿した。アルバイトの意味で、他の弟子たちの歌の添削を手伝い、事務や雑事もやった。門人たちの殆どが上流階級の娘たちや夫人だったので、身分や衣服の上で、一葉は肩身の狭い思いをしたろうが、実力は誰にもまさっていたし、一葉もそれを自覚していた。一葉は二十六年の四月ある恩師が死んでも、もってゆく香典がだせなくて、葬式にゆかなかったり、羽織をきると外から見えなくなる部分に、別な布をつぎたした袷をつくった。また会合にゆくとききるようにと、中島歌子が度々衣類を贈ったりしている。歌子も一葉の実力を認め、ゆくゆくは一葉を後継者にしようと話していた。淑徳女学校の国語の教師に一葉を推薦したのも彼女だったが、一葉が学歴をもたないという理由で、学校側はとらなかった。一葉は中島塾でえた親友の一人の野々宮喜久子の紹介で、東京女高師時代の友人で、後に東京女子大学の学長となった安井哲子に「源氏物語」を講じて、生計を助けた。他方に中島歌子はあとになって歌業がみだれ、素行上の噂もあったことから、一葉と塾との関係がうとくなった。足かけ九年間の縁であった。しかし、それにはもう一つの理由があった。一葉と半井桃水との間にあらぬ噂がた

ち、歌子から忠告をうけたからだった。一葉は真実のところ、歌子の和歌を感心していたわけでもなかった。

二十三年には、一葉一家は本郷の菊坂町七十番地にうつり、翌々年六十九番地に引っ越した。二間つづきの離れだった。当時の収入の道は、裁縫、洗濯物をしてとどけることであった。昼間は内職をし、図書館通いもし、夜二時や三時まで原稿をかく勉強をした。一葉一家の貧乏が一番ひどい時代である。他から借金をして、古い借金をうめる風であった。一葉が三十二歳の半井桃水に弟子入りしたのは、十九歳の五月で、明治二十四年である。野々宮喜久子が桃水の妹幸子の友人であったから、一葉はかねて桃水の家に内職の洗濯物などとどけ、家を知っていた。一葉はかねて文学の師をほしかった。喜久子にたのんで紹介してもらったのである。桃水はそのころ「朝日新聞」に小説をのせていた。ここで桃水の身もとを洗ってみよう。

半井桃水の本名は冽で、宗対馬藩の士族の出であった。長崎県厳原の典医の家に、万延元年に生まれ、大正十五年に死んだ。「東京朝日新聞」に小説をかいていたというと、大した文士ときこえるが、東京朝日に入った事情はつぎのようだった。

「大阪朝日新聞」主幹の津田貞が、明治十三年に「朝日」をでて、新しく「魁新聞」を発行した。半井桃水はそこに入った。しかし、経営不振でそれがつぶれたとき、大部分の社員が「大阪朝日新聞」にもどったが、そのなかに桃水も入っていた。そして明治二十一年に、星亨の機関紙の「めざまし新聞」を「大阪朝日新聞」が買って「東京朝日新聞」をつくったとき、桃水はそこにうつった。はじめは論説記者で、のちに小説の連載に転じた。一葉が師事した二年目に、桃水は同人雑誌の「武蔵野」を刊行した。これは数カ月でつぶれたが、一葉はそこに初期作の「闇桜」（二十五）「たま襷」（二十五）「五月雨」（二十五）の三つをのせた。また「別れ霜」（二十五）を「改進新聞」にのせるように計らい、一葉は生まれて始めて、三十五円の稿料をえた。一葉の貧乏を知っていたが、桃水は現金では世話しなかった。

「武蔵野」を介して、一葉の才能が文壇に認められた。「萩の舎」時代の友人の田辺龍子は、あとで評論家の三宅雄二郎と結婚して、三宅花圃といった。当時一葉の境遇に同情して「都の花」と「文学界」に橋渡ししてくれたので、一葉の執筆範囲は、それらへも拡がった。また「改進新聞」や「甲陽新聞」にも連載できた。むろん花圃は一葉よりも一歩早く世のなかにでていた。すでに明治二十一年に、田辺龍子は亡兄の法要をする費用をえるため、「藪の鶯」という長編を、坪内逍遙のすいせんで、彼の序文をつけ、一流の出版社の金港堂からだした。花圃がたくさんの印税をうけたのをみて、貧乏な一葉は、好きな文学で身をたてても、一家を養えるようになれるとおもったのである。花圃は一葉の死後、一葉についてはよくいわなかった。しかし、一葉の方は恩はあっても花圃を尊敬していなかったから、よく思われる筈がないわけだった。

二十六年の夏一葉は小商をおもいたって、下谷竜泉寺町にうつった。店は長屋建の一つで、家賃は一円五十銭、敷金が三円であった。駄菓子や雑貨類、子供向きの玩具をならべた。けれども、実際に店をだしてみると、品物の仕入れにゆくのは一葉自身以外になかった。一葉は大きな荷を背負って、往復二里を歩いた。創作で頭をつかい、夜ふかしをした一葉に、この方の負担は大きすぎた。竜泉寺町では「文学界」への寄稿がはじまると同時に、作品の評判がよかったので、同人達が遊びにいった。生計においつめられて、高利貸からもかりる有様であった。

一葉の新しい住いのあったところは、吉原遊廓への入口のうら手にあたり、普通犬音寺前とよばれた。後に一葉は名作の「たけくらべ」に、ここを使っている。商売に見切りをつけた一葉は、ようやく開けてきた文運に安定しようと、二十七年の五月一日にまた引っ越した。本郷区丸山福山町四番地にあった守喜という鰻屋の離れである。馬場孤蝶ら「文学界」の同人らは、ここに足しげく通ったが、彼のかいたものによると、一葉の新住居は、待合や銘酒屋のならんだ新開地の路地の奥にあった。ここは一葉の終焉の場所ともなったが、一葉の円熟した代表作はすべてここでか

かれたのである。むろんジャーナリズムにも流行しかけた。とはいっても今の大衆作家らのように金がたまらなかったし、第一に彼女はじきに死んでしまう。そこには、足かけ三年すんだ。一葉は一家の貧乏について、日記のなかにこくめいにかいた。貧乏は彼女を人生に徹しさせ、文学を育てた半面に、貧乏のゆえに、女として気の毒な事件もおこった。一葉は独身だったが、すきで独身にふみきったり、独身を通したわけでなかった。ここで、彼女対男性の問題について、三、四とりあげねばなるまい。

一葉の父が、前にのべたように、府庁に勤めていたとき、上役に夏目漱石の父親の直克がいた。職を失って困っていた則義は、直克からいつも借金をする間柄だった。直克には長男の大助というのがあったが、親同志の間に、大助と一葉とを許婚にしようかという話があった。しかし、夏目家は樋口一家を背負うことになるのを恐れて、その話を断わった。その後大助は若死した。

つぎは新興出版屋の博文館主大橋佐平の長男の新太郎と一葉との縁談である。新太郎は後に華やかな実業家となったが、そのころはまだ書籍をくばって歩いていた。新太郎の妹が音羽夫人のとき子である。このことは一般に知られてないが、一葉の親友の伊東夏子（中島塾の）が、直接平田禿木に語り、禿木はそれを私自身に伝えた。いうまでもなく一葉の方が、その縁談を断わった。

第三にくるのは、渋谷三郎（後に坂本と改姓）との悲話である。坂本の父親は則義と同郷であった。渋谷三郎が苦学しながら（実家は富豪）東京専門学校（後の早稲田大学）に通っていたとき、則義は彼の保証人をしていた。渋谷は一葉よりも五歳年長である。そんな関係から、則義は将来有望にみえた渋谷に、一葉をめあわせたくて、渋谷にその話をしたところ、渋谷自身はその場で確答はしなかったが、その後も渋谷は一家と親しく交わり、婚約はほぼ定まった形におもわれていた。父も二人の許婚をきまったものと見なしていた状態で急死した。あとで一葉の母親がはっき

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com